

## 昼寝刻

山田真砂年

昼顔の停電したる色をして  
富士の水たらふく飲んで涼みをり  
電柱に犬の染みある日の盛  
ワルナスビとて可愛らし日の盛  
釣り銭を待つ間も扇子使ひをる  
嘘つける淋しさに水打ちにけり  
万緑や嘘のほころび始めたる  
凌霄の嘘重ねたる色をして  
葉のゆれて毛蟲もゆれてをりにけり  
大汗の男大盛り注文す  
三尺寝眩しき方に背を向けて  
一人来て寡黙な刻を半夏生草  
虎が雨鋼光りに力石  
梅雨どきのスタバに犬を抱いてくる  
月見草乙女峠を越ゆるとき  
片蔭や虜囚のごとく一列に  
身の丈に薄き雲浮く氷室かな  
蓮咲いて三尺三寸水の上  
ざりざりと皮むき梨は昼の月  
金メダル必ず嚙るパリは秋  
秋早鬱どぶといふ字を五回書き  
東京に溝ありし頃黄のカンナ  
誰も彼も口あいてをる残暑かな  
稲の花散り深閑と昼寝刻  
稲の花赤子眠りて太りゆく